

私の一冊

看護学科 今福恵子 先生

芝木好子著 『湯葉・隅田川』

小鹿図書館 : 「湯葉」:『昭和文学全集 19』(918.6/Sh97)所収

学生時代、たまに古書店に立ち寄り、古書の独特の匂いがする中で文庫本を選ぶのが好きでした。そんな中この「湯葉」というタイトルにひかれ、読み終えた時にひとつの人生を生ききった清々しい感覚を今でも覚えています。

「湯葉」という中篇小説は、作者の母方の祖母をモデルにして、その半生が描かれています。明治維新により生活が窮迫した幕臣の娘落(ふき)は、神田の湯葉商美濃屋へ養女に出されます。その時の落はかぞえ歳で 15、しかも父親から養女先は商家か武家かの選択を迫られ、自ら商家を選びました。

美濃屋で初めて知った湯葉の美味しさ、商家の活気、さらに丹精こめて結んだ湯葉を嫁入りとよび、湯葉を慈しむ美濃屋主人吉衛の気持ち、落の心にしみていきます。そして落は、朝早くから一日中忙しい中懸命に働き、美濃屋の家業をひきつぎ、自身の商才と創意工夫により発展させていきます。しかし、病弱で結婚前から妾をもつ夫とは心を通わせることもなく夫は病死、さらに必死で発展させた美濃屋を息子に継がせたいと思っても叶わず、商家の3男を娘の婿にするという希望も娘の自殺未遂により叶わず、食文化の変化に伴い美濃屋も次第に衰退し・・・と、落があれほど献身的に尽くした、美濃屋の末路は残念な結果になりました。

商家を支えた女性の一代記なので、読み手の環境の変化によって、また違った読み方ができます。昔読んだ時には、器用で賢く、さらに中元や暮れのつけ届けなど、相手先に喜ばれるものを選ぶ、ひたむきな落に感銘した記憶が強かったのですが、今回改めて読んでみると、妻そして子供を育てる母としての苦悩に、はらはらしながら小説の世界に入っていました。また、廃業時落は 40 歳であり、その後の人生を自分なりに空想したりしました。

「湯葉」は明治 21 年から日露戦争までを背景とし、前述したように祖母がモデルであり、作者の父は浅草の呉服業を営んでいたことから、作者のルーツを垣間見ることができます。また下町の商家の気風や、文明の進化によって壊されていく、古きよき生活への郷愁も伝わってきます。

明治時代という、女性にとって選択の自由がなく窮屈な時代の中で、凜とした内なる強さを持ち、自らの人生を前向きにとらえ、颯爽と生きる落の人生にふれてみるのもいいと思います。また作者は、1942 年「青果の市」で芥川賞を受賞、1961 年「湯葉」で第十二回女流文学者賞を受賞、1984 年「隅田川暮色」で第 16 回日本文学大賞を受賞し、その他にもたくさんの素敵な作品があります。